

都市へ集中する買物

水戸、日立を中心とした 地域住民の買物圏の概要

はじめに

去る7月に実施した「買物圏調査」の結果がまとまったので、その要点を紹介する。

この調査は、「水戸・日立広域都市圏」の開発計画に役立つことを直接の目的として行なつたものである。「水戸・日立広域都市圏」の開発計画というのは、水戸市と日立市を中心とする10市町村を結びつけて、人口100万人程度の広域都市を開発し、本県の発展の一拠点とするとともに、首都圏・東京への人口集中の緩和に役立てようという計画のことである。

このように、この調査は、「広域都市圏」の開発計画、たとえば各種の都市施設を合理的に配置したりするうえでの基礎資料を得ることを当面の目的としている。しかし、この調査の調査地域は、「広域都市圏」とその周辺の市町村、合わせて38市町村にまたがる広い地域で行なわれており、しかも、調査事項には、買物に関するものがらほかに通勤通学の状況なども含まれているので、通勤通学与買物との関係、取扱商品とその販売形態との関係等、ひろく県内の消費者の行動を観察するうえでも役立つところが少なくないと思われる。

この調査は、前述の調査地域内に所在する公立中学校の2年生(21,700人)のなかからその2分の1(回収数10,958、回収率91.3%)を抽出し、抽出された生徒を通じて、その生徒の属する世帯について調査したものである。したがって、調査世帯の構成は、当然、母集団としてその全世帯の忠実な縮図となつていない面がある。(もつとも、「買物先市町村別買物世帯構成比」など、この調査の主要な集計事項は、ほぼ全世帯の動向を反映しているとみられるが)また、調査した世帯の数は、とくに学校別などでみると必ずしも充分とはいえず、したがって、多少の標本誤差を含

むと考える必要がある。調査の結果をみる場合、このような点について、あらかじめ御注意頂きたい。

1 居住市町村別にみた結果

—どこへ買いに行くか—

図1は調査地域内の市町村の主な買物先と買物率を示したものである。なお、ここで「買物率」というのは、個々の市町村について、たとえば水戸市での買物が「地元以外での買物」のなかではいちばん多いと答えた世帯の比率を、調査世帯に対する比として求め、これをその市町村の水戸市での買物率としたものである。

他の市町村での買物は、当然のことながら、なるべく近いところでなされる。しかし、交通の便がよければ、多少遠くても出かけて行く。図1には、そうした様子が現われている。なお、あとでみるように、商品には、主として地元で買われるもの(食料、日用雑貨など)と、必ずしもそうでないもの(衣料、家具など)とがある。図はそれらのすべての品目一全品目総括一の動向を一括して示したものである。

まず、「広域圏」内の市町村についてみると、水戸市の居住者は、ほとんど他の市町村へ出かけて買物することはない。わずかに、東京での買物率6%が目目される程度である。「広域圏」内のその他の市町村は、「域外」の多くの市町村もそうであるように、水戸市での買物が多く、日立市を除いて、水戸市での買物率はすべて50%をこえている。とくに勝田市の91%と大洗町の84%が高い。常陸太田市と東海村には、水戸市のほかに日立市での買物もみられ、那珂町には、常陸太田市での買物がわずかながらある。なお、広域圏内の市町村は、おしなべて、広域圏以外での買物は少ない。

広域圏周辺の地域についてみると、まず域内Ⅰ（十王町、高萩市および北茨城市）は、水戸市からの影響をほとんど受けず、日立市から近い十王町、高萩市および北茨城市の順に日立市での買物率が高い。ほかに、同地域の中心にある高萩市での買物も少ない。また、北茨城市では、福島県での買物率が34%とかなり高い。

域外Ⅱ（金砂郷村、水府郡、里美村および大子町）は広域圏での買物率は55%で、他の域外地域に比べて、いちばん高い比率を示している。この地域の広域圏への依存関係は、ふたつに分れている、すなわち、大子町とそれ以外の3村とであつて、前者は水戸市に、後者は常陸太田市に多く依存している。

域外Ⅲ（大洗町、山方町、緒川村および美和村）も、全体としてみると、域外Ⅱに次いで広域圏（ほとんど水戸市）での買物率が高い。とくに水郡線を沿う大宮町と山方町とがそうである。しかし、緒川村と美和村は、むしろ近接する大宮町や御前山村で買物することが多く、また、両村とも栃木県での買物率（それぞれ22%および38%）がかなり高い。

域外Ⅳ（常北町、桂村、御前山村および七会村）では、常北町に、隣接する桂村や七会村への

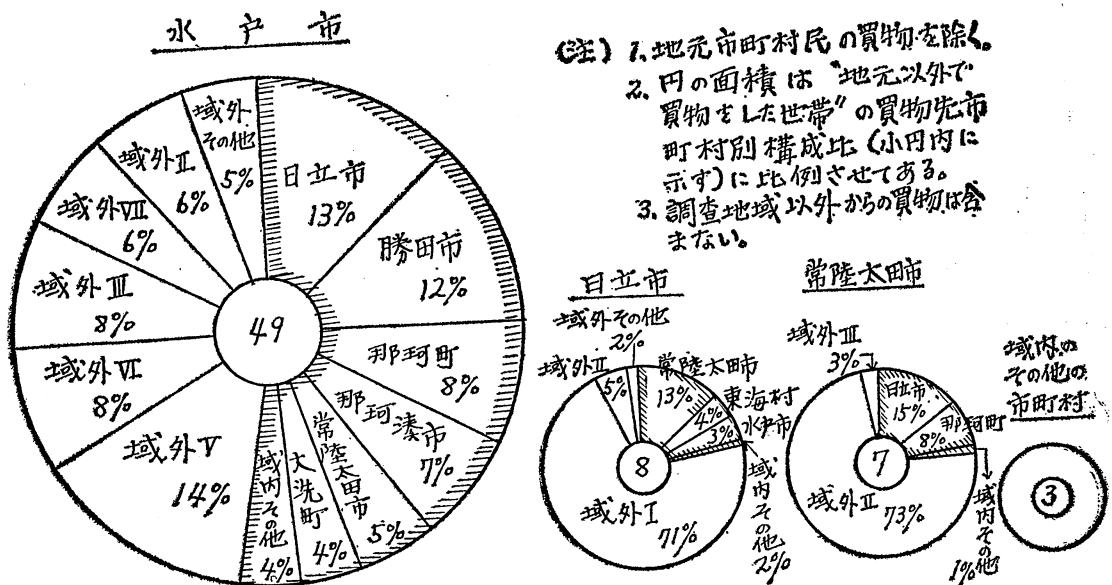
消費財供給地としての機能がみられるが、常北町自体は、水戸市に隣接しているだけあつて、水戸市での買物率は82%の高率となつている。水戸市での買物率は、御前山村の43%がこれに次いで高い。七会村は、笠間市での買物がいちばん多く、常北町での買物がこれに次いでいる。なお、御前山村と七会村には、栃木県での買物（それぞれ28%および14%）がみられる。

域外Ⅴ（内原村、友部町、岩間町、笠間市および岩瀬町）は、常磐線と水戸線の沿線にあり、しかも、笠間市のような供給地が介在するため、買物先は離散的である。その中であつて、水戸市に近い内原町、友部町および笠間市の順に水戸市での買物率が高い。とくに内原町は90%の高率となつている。なお、岩瀬町および岩間町は、それぞれ下館市および石岡市での買物率がいちばん高い。

域外Ⅵ（茨城町、美野里町、石岡市および小川町）は、水戸市と石岡市の両商圏に分断されたかたちになつており、全体として広域圏での買物率はいちばん低い。うち、茨城町だけは、水戸市での買物率は86%と高率であるが、美野里町と小川町は石岡市での買物が圧倒的に多く、また石岡市は土浦市での買物率が高い。

最後に、域外Ⅶ（旭村、鉾田町、大洋村および

図2 広域圏内主要都市の買物客吸引力と買物客の居住市町村別内訳 —全品目総括—



大野村)は、全体として、銚田町での買物率がい
ばん高い。しかし、銚田町としては、他市町村で
の買物は水戸市ですることがもつとも多い。旭村
は、銚田町、大洗町および水戸市の順に買物率
が高くなっている。大洋村と大野村は広域圏での買
物はほとんどない。

2 買物先市町村別にみた結果

一どこから買いに来るか一

図2は、広域圏内の3市の買物客吸引力を示し
たものである。また表1には、広域内主要都市の
通勤通学者および買物客の吸引力を示した。これ
らの「吸引力」は、調査地域内に居住する通勤通
学者または買物世帯の通勤通学先または買物先市
町村別構成比として求めたものである。すなわ
ち、調査地域外からからの通勤通学と買物は含ま
れていないことに注意すべきである。もつとも、
調査地域を設定する際、通勤通学率などの指標か
ら、広域圏との結びつきの強い市町村だけをとつ
て調査地域としているから、調査地域以外の分が
含まれていなくても、大勢にはあまり影響はない
とみてよい。

図2からは、ただちに、水戸市の買物客吸引力
(したがって周辺地域への消費財供給地としての
機能)が、他の市町村にくらべて格段に大きいこ
とが知られる。すなわち、図の小円内にも示した
ように、調査地域内の世帯のうち、他の市町村で
買物したことのある世帯の半数に近い49%は、水
戸市での買物がいちばん多いと答えているわけ
である。水戸市以外の市町村の「吸引力」は小さ
く、日立市8%、常陸太田市7%その他の市町村
3%となっている。

水戸市への買物客は、域内から53%、域外から
47%で、ほぼ等しい割合で流入している。日立市
へは、域外Ⅰから(71%)、また常陸太田市へは
域外Ⅱから(73%)の買物客が多い。

表1には、広域内主要都市の通勤通学者と買物

客の「吸引力」が並べて示してある。これをみる
と一方の比率(吸引力)の大きい地域は他の比率
もまた大きいことがわかる。しかし、水戸市の場
合は、通勤通学者と買物世帯の「吸引力」はとも
に大きい、買物世帯吸引力の方がなり大きい
のに対し、日立市ではその反対に、通勤通学者
吸引力は大きい、買物客吸引力はそれに比べてか
なり低いというちがいがみられる。ここに、水戸
市と日立市の、一方は文教・商業都市、他方は工
業都市という機能の差がみられる。次に、常陸太
田市と勝田市の「吸引力」が大きい、前者は水戸
市に近い性格をもち、一方、後者は日立市に似て
いる。しかし、勝田市の買物客吸引力は、通勤通
学者吸引力に比べていちじるしく低くなっている。

2 品目別にみた結果

この調査では、合計14の品目について、その買
物先や利用する商店の種類を調査している。ここ
では、品目別に他の市町村での買物率の一般的傾
向を観察することにする。なお、ここでいう品目
別の「買物率」は、買物世帯の買物先を町村別構
成比として品目別に求めたものであるが、その算
出にあたっては、地元市町村での買物も含めて計
算してある。この点、いままでみてきた「全品目
総括」における買物率(地元以外での買物だけに
着目して計算してある)とことなるから注意され
たい。

図3をみると、漁・肉、卵類から菓子類までの
4品目(食料品)は、他の市町村での買物は10%
未満で少なく、和服類から身のまわり品小物・ア
クセサリー類までの4品目(衣料品)は、食料品
とは反対に、他の市町村での買物が多い。とく
に、和服類や洋服類の比率は40%前後とかなり高
い。電気製品、家具および日用雑貨品の3品目
(住居用品)のうち電気製品と家具は、衣料品と
同じく他の市町村での買物率は高い。しかし、日
用雑貨品はやや低い。最後に、医薬品・化学品以
下の3品目(雑品目)の買物率には、全体として
の明瞭な傾向はみられない。そのうち、医薬品・
衣料品と書籍・文具類の買物率は20%でやや低

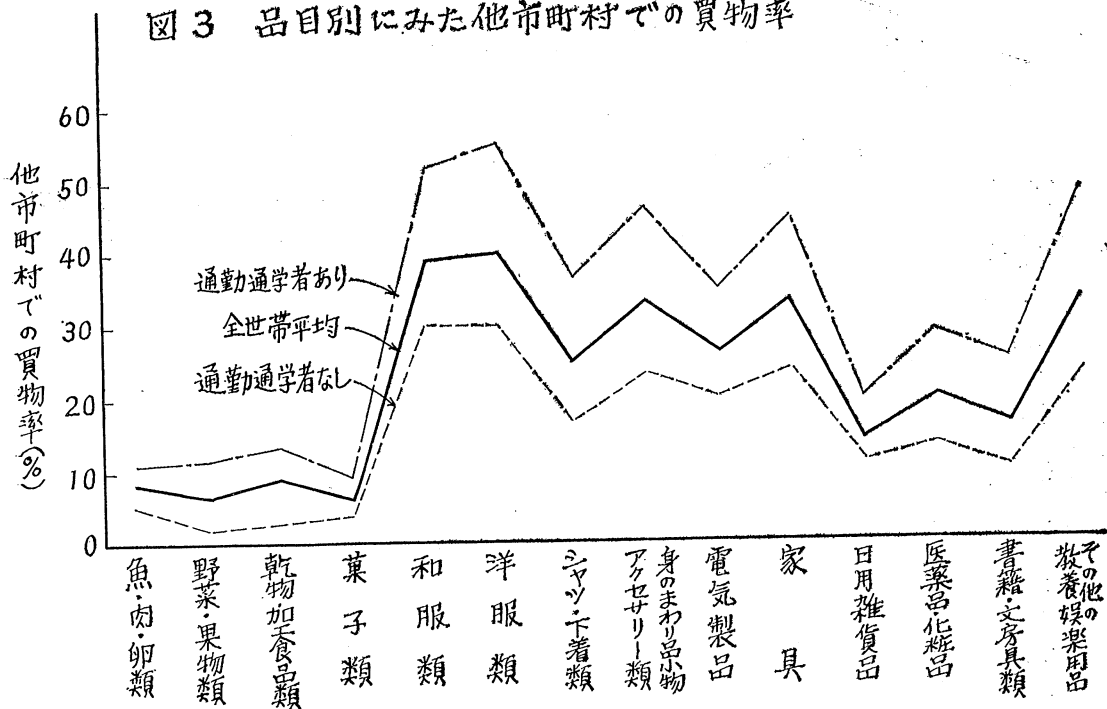
表1 広域圏内主要都市の通勤通学者および買物客呼引力

一通勤通学者および買物世帯の通勤通学先または買物先別構成一 (単位%)

	総計	域内計	域外計	域内の内訳					
				水戸市	日立市	那珂湊市	常陸太田市	勝田市	その他
通勤通学者	100	70	30	38	17	2	4	7	2
買物世帯	100	67	33	49	8	0	7	1	2

注 調査地域以外からの通勤通学および買物は含まない

図3 品目別にみた他市町村での買物率



(注) 1. 買物率は、買物世帯の買物先市町村別構成比（地元市町村を収む）として算出したものである。
 2. 日用雑貨品は金物・荒川・陶磁器類からなり、その他の教養娯楽用品は、カメラ・楽器・運動具等からなる。

く、その他の教養娯楽用品は33%と高くなっている。

いままでみた品目別の傾向は、別に、次のように整理することもできよう。つまり、食料品の4品目や住居用品のうちの日用雑貨品のように、他の市町村ではあまり買物されず、主として地元で調達される品目（仮に「最寄（もより）品」、という）と、反面、衣料品や住居用品（日用雑貨品を除く）、その他の教養娯楽用品のように他の市町村での買物率の高い商品（「非最寄品」）とがある。前者は、消耗性の高い、いわば「日用品」であり、後者は比較的高価で、大きな商業都市で選択的に購入されることの多い品目群といえよう。

なお、図3には、全世帯平均の買物率のほか、通勤通学者のある世帯の比率と、ない世帯の比率をあわせてかかげた。これをみると、他の市町村での買物率は、例外なく、前者のほうが後者よりも高いことがわかる。

買物は、品目別にみると、どういう形態の店でなされることが多いか、図4は、広域内での買物について、「主として利用される商店の種類」を品目別に示したものである。これによると、まず魚・肉・卵類から菓子類までの4品目（食料品）は、普通の店での買物が多く、これに次いでスー

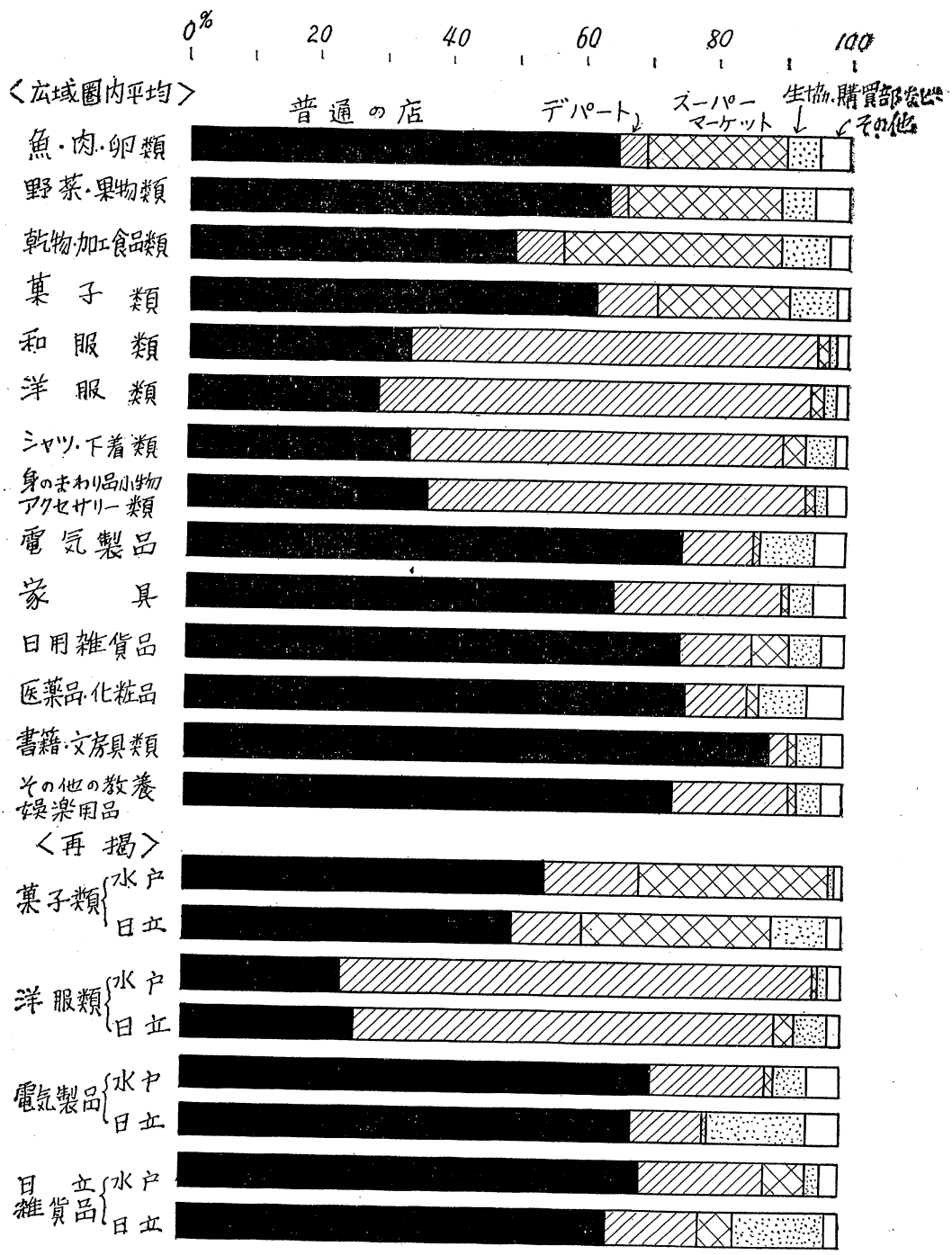
パー・マーケットでの買物が多い。スーパー・マーケットでの買物が多いのは食料品の特色で、なかでも、乾物・加工食品類は、32%がそこで買われている。

和服類から身のまわり品小物・アクセサリー類までの4品目（衣料品）は、デパートで買物されることが圧倒的に多い。とくに、洋服類は買物世帯の66%までが、デパートで買物することが多いと答えている。デパートに次いで普通の店の比率が高い。しかし、その比率は30%前後で、調査した品目群のなかではもつとも低い。

電気製品から日用雑貨品までの3品目（住居用品）とその他の3品目（雑貨品）は、おしなべて普通の店での買物が多い。なかでも、書籍・文房具類は、88%の高率となつている。次に多いのはデパートで、とくに家具（25%）その他の教養娯楽用品（18%）での比率が高い。なお電気製品と医薬品・化粧品の場合は、生協・購買部の利用も目につく。

次に、各品目の買物に占める商店の形態別割合（シェア）を、とくに水戸市と日立市とについてみると、図4からもわかるように、広域圏全体の傾向とあまりちがいはないが、水戸市のほうが総じてデパートのシェアが高いのに反し、日立市では生協、購買部の比重が高く、それだけ普通の店のシェアが低くなっている点に特色がある。

図4 品目別にみた利用商店の種類



(注) 1. 広域圏内および水戸市、日立市で買物した世帯について示した。
2. 地元市町村民の買物も含めてある。